

◆連載-Vol.18

現代建築ヤブニラミ

中谷 正人 (建築ジャーナリスト)



執筆者プロフィール

中谷 正人 (なかたに・まさと)
1948 神奈川県生まれ。1971年
千葉大学建築学科卒業、『住宅
特集』『新建築』編集長を経て
1994年からフリー編集者。
1999年～2014年千葉大学客
員教授。木の建築フォーラム理事、
日本建築学会建築文化事業委員
会幹事

新しい時代の始まり

1960年前後概観

1945年の終戦以降、日本が瓦礫の中から立ち直るのにそれほどの時間はかからず、1955年には「もはや戦後ではない」と『経済白書』は宣言。経済発展はさらに加速した。そして所得倍増政策、持ち家政策へと進み、1964年の東京オリンピック、1970年の大阪万国博覧会をふたつのピークとして、日本の社会全体が大きく変動した。

東京オリンピックに合わせて東海道新幹線が開通し、首都高速道路も整備された。トンネルに入るたびに大急ぎで窓を閉めていた蒸気機関車は姿を消しはじめ、かつて「鉄腕アトム」で描かれていて、遠い未来だと思っていたビルを縫うように空中を走る高速道路が現実のものとなった。おそらく鉄腕アトムが空を飛ぶのもそう遠い未来ではあるまい。

だから、新しい技術は明るい未来を開いてくれるものだと信じて疑わなかった。それに拍車をかけて、豊かな未来を描き出したのが大阪万博であった。当時、第一線で活躍していた建築家が総出で参加したのだから、デザイン、構造システムなど、それぞれに新しいアイデアが満載されていた。

この時代は世界中が動いたが、日本の変貌はとくに激しかった。明治の開国以来、建築に限らず法律やファッション、生活様式にいたるまで、新しい暮らしの文化は主にヨーロッパから届いていたのだが、敗戦国日本にアメリカ軍が駐留するこ

とによって、アメリカからの影響も強く受けるようになった。

戦後の日本の家電商品はアメリカのコピーだと非難されたことがあった。この指摘に対して忸怩たる思いを持った日本人も多かったが、実は当然の結果であることはほとんど知られていないようだ。これを教えてくれたのは日本の生活史研究家の小泉和子であった。

東京・大田区にある「昭和のくらし博物館」で、館長でもある小泉から直接聞いたのは、アメリカ軍が駐留するに当たって、将校にはアメリカ本土と同じ暮らしができるように要求され、そのためにテレビ、冷蔵庫、洗濯機、扇風機、トースターなど、おそらくGE（ゼネラルエレクトリック社）などアメリカのメーカーのノウハウが無償で日本の電機メーカーに渡されたというのだ。

持ち前のまじめさで、オリジナルよりも優れた製品を作り上げてしまったため、先ほどの非難はやっかみ半分のバッシングだった、というのが本当のようだ。

また、学校や会社などで一般的に使われていた（今ではだいぶ様変わりしているが）机やキャビネット、本棚などの事務機器がスチール製で色がグレイであることも、アメリカ軍の標準仕様からきているという指摘もされた。納得できる話であった。

家電製品や事務機器だけではない。ファッションも然り、音楽も然りである。50年代後半から始まるアメリカンポップスと、そのカバーバージョンが流行った。中尾ミエ、伊東ゆ

かり、弘田三枝子、ザ・ピーナッツ、平尾昌晃、山下啓次郎、ジェリー藤尾など枚挙に暇がない。

ジェームス・ディーンやエルヴィス・プレスリーにあこがれてリーゼントが流行り、銀座にはみゆき族が溢れ、湘南には石原慎太郎命名の太陽族が跋扈した。当時高校生だった私たちはアイヴィーかコンチ（ネンタル）かで競い合った。あえて説明するならばアイヴィーはVANであり、コンチはJUNだ。

テレビではアメリカの西部劇とホームドラマ。きれいなママと物分りのいいパパが明るいキッチンでテーブルを囲む、和やかな朝食風景。その背後には電気冷蔵庫（そのころの日本は氷を入れる冷蔵庫だった）やジューサー、トースターが並ぶ。

西部劇のヒーローはなんと言ってもローン・レンジャーだ。白馬シルバーに跨り、トントを助手にした黒マスクの英雄。英雄はまだまだいた。ローハイドのフェーバーさん、ララミー牧場のジェス・ハーパー。もっと書きたいが編集者からカットされそうだからこころをこらへんで止め。下駄を履いて小学校に通い、貧しい食事が取れなかった昭和23年生まれの小僧にとって、ラジオから流れるアメリカンポップスやテレビに映るモダンな暮らし、街中のアイビーファッションは輝いていた。

建築から都市へ

こんな時代を背景として、モダニズム建築が一気に街を覆うようになった。といっても目に付くような大きな建物は公共

建築か大手のオフィスビルやデパートがほとんどだったから、公共建築にその後の建築の規範を求めようとしたのも決して見当違いではなかったかもしれない。街中の建物のほとんどは見過ぎてしまう路傍の石のような存在だった。あるいは、まだデザインというものが認識されていなかったのかもしれない。

だからこそ、志のある建築家たちは最大の努力をした。おそらく荒野に立ち向かう開拓者のような気持ちだったに違いない。まだ見ぬ理想の建築を目指して突き進んでいった。

まず、丹下健三の「東京計画1960」が都市計画の可能性を社会に突き付けたと同時に、「都市計画」概念を根付かせ、1962年には東京大学に「都市工学科」を創設し、翌63年には教授として就任した。「代々木体育館（正式名称：国立代々木屋内総合競技場）」や「東京カテドラル聖マリア聖堂」によって、シェルや折板構造を用いた大空間表現の可能性を証明したが、これは同時に都市のスカイラインを大きく変えることにもなった。建物単体としてのデザインから都市デザインへと、丹下自身の方向性を大きくシフトしたが、建築界にも都市計画の重要性を波及させたのであった。

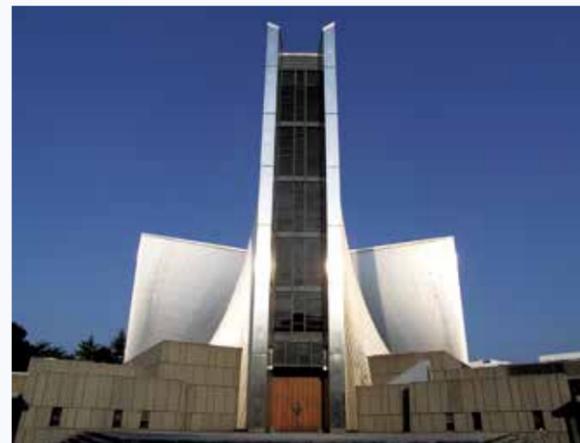
この「東京計画1960」をスタッフとして協力したのが磯崎新であり黒川紀章であった。だからいずれも丹下の薫陶を受けていることは間違いない。ただし、その後はまったく異なる方向性をとることになるのだが、このふたりのその後の活躍については改めて記す予定である。（続く）



昭和の暮らしと家電
提供：有限会社グローブプランニング
(産業フェアin善光寺平「昭和のなつかし家電と暮らし」展示コーナー)より



代々木体育館 出典：ウィキメディア・コモンズ (Wikimedia Commons)



東京カテドラル聖マリア聖堂 外観
出典：ウィキメディア・コモンズ (Wikimedia Commons)



東京カテドラル聖マリア聖堂 内観
出典：ウィキメディア・コモンズ (Wikimedia Commons)